

「労働の二重性」把握と 「価値形成・増殖過程」論

中川 弘

■ 目 次

はじめに

〔一〕 第三篇第5章での「価値形成・増殖過程」論

(1) 第二節の二つの「総括的叙述」

(2) 第二節での考察内容の追跡—計算例①～③

(3) 確認しておくべき三つの要点

〔二〕 第三篇第6章での「価値形成・増殖過程」論

(1) 「鍵」となる叙述

(2) 確認できる点と検討を要する問題点

(3) 検討のまとめ—以上から読み取れること、確認できること

はじめに

周知のようにマルクスは、商品を生産する「労働の二重性 (Doppelcharakter)」、すなわち、商品の使用価値を形成するものとしての具体的有用的労働という属性、商品の価値を形成し、価値の実体をなすものとしての抽象的人間的労働としての属性、この労働の「二つの属性」・「労働の二重性」は、マルクス自身によってはじめて指摘されたものであることを、『資本論』第一部第一篇第1章第二節の冒頭で述べている（『資本論』I a、新日本出版社、1997年、p.71、以下『資本論』からの引用はこれによる。またアンダーラインと、内容を敷衍するための括弧内の補足は、引用者による）。

マルクスは、この「労働の二重性」把握が「経済学の理解にとって決定的な点である」（p.71）と述べているが、「決定的な点」とされる所以が最初に明らかにされるのは、第三篇「絶対的剰余価値の生産」の第5章と第6章においてである。「労働の二重性」の把握がなければなしえない考察、「労働の二重性」の把握があってこそなしえた考察が、そこで行なわれているからである。ただし、そこでの考察内容には、なお検討すべき余地があると思われる問題が伏在していると考えられる。その点を指摘し検討することが、小稿の主題である。

〔一〕 第三篇第5章での「価値形成・増殖過程」論

第三篇第5章「労働過程と価値増殖過程」は、第一節が「労働過程」の考察に充てられ、第二節で「価値増殖過程」が考察される。第二節の末尾近くに、この節の考察を締め括る、周知の二つの「総括的叙述」が置かれている。それら二つの叙述全体の内容を、整合性をもったものとしてどのように理解するか、これが問われる問題である。

(1) 第二節の二つの「総括的叙述」

まず第二節末尾近くの二つの「総括的叙述」を確認しておく。**【引用①】**と**【引用②】**である。

【引用①】「こうして分かるように、以前商品の分析から得られた、使用価値を創造する限りでの労働（具体的有用的労働）と、価値を創造する限りでの同じ労働（抽象的人間的労働）とのあいだの区別は、いまや、生産過程の異なる二側面の区別として現われた。

労働過程（Arbeitsprozess）と価値形成過程（Wertbildungsprozess）との統一としては、生産過程は商品の生産過程*である。労働過程と価値増殖過程（Verwertungsprozess）との統一としては、それは資本主義的生産過程、商品生産の資本主義的形態**である***。」（p.337）

* 生産された（単純）商品の価値は一下記の**【引用②】**と併せ考えれば—剰余価値を含まず、生産諸手段の価値の移転部分と商品生産者の生活費（再生産費）の合計と理解される。

** 生産された商品の価値は、剰余価値を含む、 $C+V+M$ と理解される。

*** この記述に続き、価値形成過程と労働過程との比較がなされている。「後者の本質は使用価値を生産する有用的労働にある。ここでは、運動は、質的に、その特殊なやり方において、目的および内容の観点から、考察される。その同じ労働過程が、価値形成過程においてはその量的側面からのみ表われる。問題となるのは、いまではまさに、労働がその作業のために要する時間、すなわち労働力が有用的に支出される継続時間だけである。ここでは、労働過程にはいり込む諸商品もまた、目的にそって作用する労働力のための、機能的に規定された素材的諸要因としてはもはや意義をもたない。それらは、いまではもはや、一定分量の対象化された労働として計算にはいるだけである。生産諸手段に含まれていようと労働力によってつけ加えられようと、いまではもはや、労働はその時間的尺度に従って計算にはいるだけである。」（p.334）→後述の「三つの計算例」が、このことを具体的に示す。

【引用①】の叙述のやや手前のところに、これまた周知の次の叙述がある。

【引用②】「価値形成過程と価値増殖過程とを比較してみると、価値増殖過程はある一定の点（『資本論』の設例では「半労働日」・6時間）を超えて延長された価値形成過程にほかならない。もし後者が、資本によって支払われた労働力の価値が新たな等価物によって補填される点（半労働日）まで継続されるだけなら、それは単純な価値形成過程である。もしも価値形成過程がこの点（半労働日）を超えて継続されるならば、それは価値増殖過程となる。」」（p.334）

* 「労働力のなかに潜んでいる過去の労働と、労働力が遂行することのできる生きた労働とは、すなわち労働力の日々の維持費と労働力の日々の支出とは、二つのまったく異なる大きさである。前者は労働力の交換価値を規定し、後者は労働力の使用価値を形成する。……労働力の価値と、労働過程における労働力の価値増殖とは、二つの異なる大きさである。この価値の差は、資本家が労働力を買ったときに念頭においていたものであった」（p.330）。言うまでもなく、この差が剰余価値となる。

(2) 第二節での考察内容の追跡—計算例①～③

冒頭のパラグラフで、資本家にとっての二つの問題が確認されている。—①彼は、商品を生産しようとする。②その生産のために「貨幣を前貸しして得た生産諸手段と労働力との価値総額よりも、大きい価値をもつ商品を生産しようとする」(p.318) こと。—これに続けて、「商品そのものが使用価値と価値との統一であるのと同様に、商品の生産過程は労働過程と価値形成過程との統一でなければならない。そこで、こんどはわれわれは、生産過程を価値形成過程として考察することにしよう」(p.319) と課題が設定される。第二節のタイトルは「価値増殖過程」であるが、考察は「価値形成過程」から始まっていることに留意したい。

その考察は、商品の価値が、「その使用価値に物質化(対象化)されている労働の分量」(同上)によって規定されることから、「その生産のために社会的に必要な労働時間」(同上)を度量基準としての、商品に「対象化」された労働の分量(労働時間数)の計算に向けられていく。生産される商品は糸である。計算は、以下三つの階梯を順次進んでいく(pp.319～333)。その際の計算の前提におかれている条件は次の4点である。

① 1労働日 = 12労働時間、② 紡績労働 = 単純労働・社会的平均労働、③ 1労働時間の労働が創造する新価値 = 0.5シリング、④ 紡績工の労働力商品の日価値 = 3シリング

〔第一階梯〕—計算例①

労働手段と原料があるのみで、労働力商品の購入なし、が前提。

<u>生産された商品 = 糸10ポンド</u>	<u>商品の価値 = 12シリング</u>
・原料 = 綿花10ポンド	10シリング
・紡錘量(労働手段の代表) = 1 / 4 錘	2シリング

〔内容〕(10シリング) 20時間 + (2シリング) 4時間 = (12シリング) 24時間(2労働日)の労働が対象化されている。これは、「綿花および紡錘の価値は、糸価値すなわち生産物の価値の構成部分をなしている」(p.321) ことを示すための計算例である。

— . . . —

〔第二階梯〕—計算例②

労働手段と原料、労働力商品の購入、労働時間は半労働日(6時間)、が前提。

<u>生産された商品 = 糸10ポンド</u>	<u>商品の価値 = 15シリング</u>
・原料 = 綿花10ポンド	10シリング
・紡錘量 = 1 / 4 錘	2シリング
・労働力商品の日価値	3シリング

〔内容〕(10シリング) 20時間 + (2シリング) 4時間 + (3シリング) 6時間 = (15シリング) 30時間(2.5労働日)の労働が対象化されている。この例では、計算例①での価値に加えて、「紡績工の労働そのものが綿花につけくわえる価値部分」(p.322) が計上され、「糸の価値はもともと綿花、紡錘、

労働力に配分されていた諸価値の合計」(p.326)であることが示されている。

しかしこの結果については、「わが資本家は愕然とする。生産物の価値(15シリング)は、前貸しされた資本価値(15シリング)と同じなのである。前貸しされた価値は増殖せず、なんらの剰余価値も生まなかつたのであり、したがって貨幣は資本に転化しなかつた」(p.325)からである。

— . — . —

〔第三階梯〕—計算例③

労働時間が半労働日から1労働日(12労働時間)に倍化する。そのため、原料、紡錘量とも、計算例②の場合の2倍を生産的に消費し、生産される商品の量も2倍となる。

<u>生産された商品 = 糸20ポンド</u>	<u>商品の価値 = 30シリング</u>
・原料 = 綿花20ポンド	20シリング
・紡錘 = 1 / 2 錘	4シリング
・労働力商品の日価値	3シリング
・剰余価値	3シリング

〔内容〕(20シリング) 40時間 + (4シリング) 8時間 + (3シリング) 6時間 + (3シリング) 6時間 = (30シリング) 60時間(5労働日)の労働が対象化されている。これは、資本家が賃労働者に対し、労働力商品の日価値を支払っており、「1日のあいだの労働力の使用、1日にわたる労働」を、自己に属するものとして現実に消費した結果*であって、「商品交換の永遠の諸法則」に従った正当な行為の結果であること(p.331)、かくして前貸しされた27シリングは30シリングに転化、3シリングの剰余価値を生んで「貨幣は資本に転化した」ことを示す例である。

* 「労働力の使用は労働そのものである。労働力の買い手は、その売り手を労働させることにより、労働力を消費する。労働力の売り手は、労働することによって、“現実に”自己を発現する……労働者になるが、彼はそれ以前には“潜勢的”にそうであったにすぎない。」(p.303)

以上が、第二節での「価値形成過程」と「価値増殖過程」についての考察の骨子である。この考察を前提として、先の【引用①】【引用②】の「総括的叙述」*がそれに続いている。

*マルクス校訂のフランス語版(ラシャトル版)の叙述は次のようになっている。

第三篇絶対的剰余価値の生産の最初の章が、「第5章労働過程と価値増殖過程」から「第7章使用価値の生産と剰余価値の生産」に、第一節が「労働過程」から「使用価値の生産」に、第二節が「価値増殖過程」から「剰余価値の生産」にそれぞれ改められた上で(江夏美千穂・上杉聡彦訳『フランス語版資本論』上巻、p.167、177、法政大学出版局、1979年)、【引用①】の部分は、「われわれの見るとおり、われわれが研究の初めに商品の分析によって証明した有用労働と価値の源泉である労働とのちがいは、いましがた、商品生産の二つの面のちがいで現われた。商品生産がもはや、有用労働と剰余価値の創造者である労働との統一として現われるやいなや、商品生産は資本主義的形態のもとでの商品生産、になるのである」(p.188、下線は引用者)、【引用②】の部分は、「剰余価値の生産とは、ある点を越えて延長された価値生産にほかならない。資本から支払を受けた労働力の価値が、新しい等価物にとってかわられる点までしか、労働過程が継続しないとすれば、存在するのは単純な価値生産である。労働過程がこの限界を越えれば、剰余価値の生産が存在する」(p.186、下線は引用者)、にそれぞれ書き改められている。

(3) 確認しておくべき三つの要点

ここまでのところで確認しておくべき要点は三点ある。

第一。計算例①～③では、商品の価値総額が、「対象化された労働」の積み上げ・足し算（対象化された労働の時間数の増大）として追跡され、その視点から価値量の漸次的増加が捉えられていて、商品の価値が、「死んだ労働」が対象化された生産諸手段の旧価値の移転した価値部分と、「生きた労働」の対象化により創造された新価値とによって構成されている点が、「二重性」を具えた労働のそれぞれの属性が果たす役割との関連では捉えられていないこと。

第二。これに対し、第二節末尾近くの【引用①】では、具体的有用的労働と抽象的人間的労働という、労働の二つの異なる属性の区別が、商品の「生産過程の二つの異なるに側面の区別」として現われると、両者の関係が下記のように捉えられていること。ただし、その具体的内容についての立ち入った説明はなされていない。それは第6章に持ち越される。

具体的有用的労働—労働過程—新価値形成には係わらない。

抽象的人間的労働—価値形成過程と価値増殖過程—新価値形成に係わる。

第三。また【引用②】では、「価値形成過程」と「価値増殖過程」が、ともに新価値の創造過程であるという意味で、「質」を同じくしつつ、後者は前者の「延長」として、すなわち創造される新価値「量」の増加が図られる過程として、とりあえず（一般的・抽象的に）把握されていること。

〔二〕 第三篇第6章での「価値形成・増殖過程」論

これに対し、第三篇第6章「不変資本と可変資本」に至ると、商品の価値のルーツが「労働の二重性」との関連で具体的に考察され、上記の、(3) 確認しておくべき三つの要点の「第一。」で指摘したような、「対象化された労働」量の積み上げ・足し算による、労働量（労働時間数）のみをもってする商品の価値量の漸次的増加の追跡とは、異なるアプローチ・異なる捉え方が開示されるが、そこには検討すべき問題が伏在している。

(1) 「鍵」となる叙述

まず「価値形成過程」と「価値増殖過程」の内容を理解する際の、「鍵」となる重要な説明を確認しておきたい。

【引用③】「われわれは、消耗された生産諸手段の価値を、生産物価値の構成諸部分として、たとえば綿花と紡錘の価値を糸価値のなかに、ふたたび見いだす。したがって、生産諸手段の価値は、それが生産物に移転することによって維持される。この移転は、生産諸手段の生産物への転化のあいだに、労働過程中に、行なわれる。それは労働によって媒介されている。」(p.341)

【引用④—1】「労働者は、同じ時間内に二重に労働するのではない。すなわち、一つには彼の労働によって綿花にある価値をつけ加えるために、もう一つには、……—彼が加工する綿花の価値と彼が労働するのに用いる紡錘の価値とを、生産物すなわち糸に移転するために—労働するのではない。むしろ、単に（生産諸手段に）新価値をつけ加えることによって、労働者は（生産諸手段の）旧価値を

維持するのである。しかし、労働対象にたいする新価値のつけ加えと生産物における旧価値の維持とは、労働者が同じ時間内に一度しか労働しないのにその同じ時間内に生み出す二つのまったく異なる諸結果なのであるから、結果のこの二面性は、明らかに彼の労働そのものの二面性からのみ説明されうる。同じ時点において、彼の労働は、一方の（抽象的人間的労働としての）属性では（新）価値を創造し、他方の（具体的有用的労働としての）属性では（旧）価値を維持または移転しなければならない。」（pp.341～342）

【引用④-2】「紡績工の労働は、その抽象的一般的属性においては、すなわち人間の労働力の支出としては、綿花と紡錘の価値に新価値をつけ加え、紡績過程としてのその具体的、特殊的、有用的属性においては、これらの生産手段の価値を生産物に移転し、こうしてそれらの価値を生産物において維持する。そこから、同じ時点における労働の結果の二面性が生じる。」（p.343）

【引用⑤】（機械の価値が1000日で摩滅するとした場合）「機械の価値の1000分の1が、日々、機械そのものからその日々の生産物に移行する。生命力がしだいに失われるとはいえ、機械総体は労働過程において不断に作用し続ける。したがって、労働過程の一要因である生産手段は、（新商品の使用価値を作り出す過程としての）労働過程へは全体としては入り込むが、価値増殖過程*1へは部分的には入り込むだけだということ分かる。」（pp.348～349）

*1（訳注）〔フランス語版、英語版では「価値形成過程」となっている〕が付され、マルクスとエンゲルスは、のちに「増殖」を「形成」に修正していると指摘している（p.350）。p.349の〔原注21〕と、p.350の本文中の「価値増殖過程」についても、同様の訳注が付いている。なお上製版より先に公刊された新日本出版社の「新書判」では、〔マルクス校訂のフランス語版、エンゲルス校訂の英語版、スペイン語版（アルゼンチン）、ロシア語版および東ヨーロッパ各国語版では「価値形成過程」となっている〕との訳注が付されている（②分冊、pp.347～349）。

フランス語版（マルクス校訂のラシャトル版）での「修正」は次のようになっている。「機械は、その活力を絶えず減少するとはいえ、労働過程ではつねに全面的に機能するものである。したがって、ある労働要因（生産手段-引用者）は、使用価値の生産のうちに全面的に入っても、価値の形成のうちには部分的にししか入らない。このようにして、二つの過程のちがいが物的諸要因のなかに反映されている。それというのも、同じ作業で同一の生産手段が、第一の過程の要素としては全面的に、第二の過程の要素としてはただ部分的に、計算されるからである」（前掲『フランス語版資本論』上巻、p.196、下線は引用者）。pp.196～197の〔原注2〕と本文でも、「価値形成」と「修正」されている。

ところが、第6章のこの個所での、「価値増殖過程」の「価値形成過程」への修正にもかかわらず、第13章第二節「生産物への機械設備の価値移転」では、訳注による修正は施されず、「価値増殖過程」のままになっている。この点は後述の（2）の1）、（3）の④で触れる。

【引用⑥】「労働は、その合目的な形態によって（具体的有用的労働という属性によって）生産諸手段の価値を生産物に移転し維持するあいだに、その（抽象的人間的労働としての属性での）運動（労働）の各瞬間に、付加的価値すなわち新価値を形成する。労働者が彼自身の労働力の価値との等価物を生産した点、たとえば6時間（半労働日）の労働によって3シリングの価値をつけ加えた点で、生産過程が中断すると仮定しよう。この（新）価値は、生産物価値のうち、生産諸手段の価値に帰せられる構成部分（C）を超える超過分（V）を形成する。この価値は、この過程の内部で生じた唯一の本来の価値〔訳注：ロシア語版、中国語版では、「新価値」となっている〕であり、生産物価値のうちのこの過程そのものによって生産されている唯一の部分である。確かにこの価値は、…支出

(前貸し)された3シリングとの関連で見ると、3シリングの新価値は再生産としてのみ現われる。しかし、この価値は、現実的に再生産されているのであって、生産諸手段の価値のように単に外見的にのみ再生産されているのではない。ある価値(前貸しされたV)の他の価値(新価値)による補填は、この場合には新たな価値創造によって媒介されている。」(p.356)

【引用⑦】「とはいえ、すでに述べたように、労働過程は、労働力の価値の単なる等価物が再生産され、労働対象につけ加えられる点を超えて続行される。この等価物のために十分である6時間ではなく、この過程はたとえば12時間続けられる。したがって、労働力の発現により、それ自身の価値(3シリング)が再生産されるだけでなく、ある超過価値(3シリング)が生産される。この剰余価値は、生産物価値のうち、消耗された生産物形成者—すなわち、生産諸手段および労働力—の等価値(C+V)を超える超過分をなす。……生産物の総価値のうち、その形成諸要素の価値総額を超える(この)超過分は、価値増殖した資本が最初に前貸しされた資本価値を超える超過分である。」(pp.356～357)

(2) 確認できる点と検討を要する問題点

第6章からの【引用③～⑦】において、確認できる点ならびに妥当性を吟味すべきと思われる問題点は、以下のとおりである。

1) 【引用⑤】の第6章の文章に付された*1【訳注】では、先述のとおり、マルクスもエンゲルスも、それぞれフランス語版、英語版で、「価値増殖過程」を「価値形成過程」に「修正」したとされていた。しかし、第13章「機械と大工業」第二節「生産物への機械の価値移転」においては、訳注による「修正」は施されず、「価値増殖過程」のままになっていた。当該箇所は次のとおりである。

a) 「まず第一に注意しておかなければならないことは、機械設備は労働過程にはいつも全体的には入り込むが、価値増殖過程にはつねに部分的にのみは入り込む、ということである。機械は、それがその消耗によって平均的に失うよりも多くの価値を決してつけ加えない。したがって、機械の価値と機械から生産物に周期的に引き渡される価値部分とのあいだには、大きな差がある。」(p.667)

b) 「本来の労働手段または生産用具は、どれも、労働過程にはつねに全体的には入り込み、価値増殖過程にはつねに部分的にのみすなわちその日々の平均的摩滅に比例しては入り込むにすぎない。」(p.668)

第6章での表記を「修正」したフランス語版でのこの部分の叙述は、ではどのようになっているだろうか。第15章「機械と大工業」の第二節「機械によって生産物に移される価値」の当該の一节【引用a)部分】は、次のごとくである(なお【引用b)】に相当する文はフランス語版にはない)。

「機械は生産物を創造する過程にはいつでも全体的に入り込むが、生産物の価値を創造する過程にはたんに部分的に入り込むにすぎない。機械はけっして、損耗によって平均的に失う価値よりも大きい価値を移すことはない。だから、機械の価値と機械がその生産物に周期的に移す価値部分とのあいだには、……大きな差がある。」(前掲訳書、下巻、p.18、下線は引用者)

この叙述では、「生産物を創造する過程」は「労働過程」に相当し、「生産物の価値を創造する

過程」とは、下線部の文意からみて、機械が損耗によって失う「価値を（新商品に）移す」過程であって「価値増殖過程」ではないと理解できる。そうだとすると、第13章の当該箇所にも、第6章の場合と同様に、〔フランス語版（第15章）では価値増殖過程への言及がなく、「価値を創造する過程」＝「価値の移転過程」と表記されている〕旨の訳注が付されてよいはずである。しかしそうはなっていないのである。—以上を踏まえたとき、われわれは、内容からみて、「形成」・「増殖」のどちらが当該過程の説明として妥当・適切とすべきか、この点をあらためて検討しなければならない。そのためにも、上記の【引用③～⑦】から確認できる点をまず見定めておく必要がある。

2) 【引用③】では、生産諸手段の価値移転を「媒介」する労働の属性は特定されていないが、【引用④-1、④-2】では、「綿花と紡錘の価値への新価値のつけ加え」と「（綿花と紡績の）旧価値の維持」とが、「労働そのものの二面性」のそれぞれの役割（一方の属性では、……他方の属性では……）との関係において、「同じ時間（12時間）に」「一度に」行なわれる労働の、二つの「相異なる諸結果」として具体的に捉えられている。

また【引用⑥】では、「新価値のつけ加え」と「旧価値の維持」の説明の順番が入れ変わり、「労働は、その目的形態によって（具体的有用的労働という属性によって）生産諸手段の価値を生産物に移転し維持するあいだに、その（抽象的人間的労働としての属性での）運動（労働）の各瞬間に付加的価値すなわち新価値を形成する」となっているが、趣旨は【引用④】と変わりはない。

3) 【引用⑥】で注意が必要なのは、労働者が「労働力の価値との等価物を生産した時点、たとえば6時間（半労働日）の労働によって3シリングの（新）価値をつけ加えた点」で、生産過程が中断した場合の説明である（計算例②のケース）。

この6時間（半労働日）の労働（抽象的人間的労働）によって生み出された新価値は、「生産物価値のうち、生産諸手段の価値に帰せられる構成部分（C）を超える超過分（V）を形成する」こと、そしてこの「ある価値」（労働力商品の購入のために前貸しされた資本価値・V）の「他の価値（新価値）による補填」は、「新たな価値創造によって媒介されている」と説明されていること、この点が重要なポイントであることに留意したい。この6時間は必要労働時間となる。

4) 【引用⑦】では、労働時間は6時間ではなく、「たとえば12時間続けられる」（計算例③のケースが考察されている）。6時間から12時間への労働時間の継続によって、労働力商品の価値を「補填」する新価値（3シリング）のみならず、「消耗された生産物形成者—すなわち生産諸手段および労働力—の価値（C+V）を超える超過分」の新価値（3シリング）＝剰余価値が生産される。継続された6時間は剰余労働時間を形成する。

（3）検討のまとめ—以上から読み取れること、確認できること

①12時間にわたる労働（具体的有用的労働）によって、（新商品の使用価値が創造されるとともに）生産諸手段の（旧）価値の1000分の1は新商品に移転して維持され、同時に進行する、同じ（6必要労働時間+6剰余労働時間＝）12時間にわたる労働（抽象的人間的労働）によって、新価値（6シリング）が創出されるが、その1/2（6時間・3シリング）の新価値は、「前貸しされた可変資本（V）」の「補填」に充当されるものとなり、あとの1/2（6時間・3シリング）の新価値は、剰余価値となること。

②もし労働が、6時間【引用①】の「ある一定の点」で中断されれば、創造される新価値は、「前貸しされた可変資本（V）」の「補填」分（3シリング）のみにとどまり、前貸資本の価値増殖は果たされないこと、価値増殖は、その「ある一定の点」（6必要労働時間）を超えて、さらに継続された労働時間（6剰余労働時間）における労働（抽象的人間的労働）によってもたらされること。

③すなわち、【引用①】の説明に即して言えば、「支払われた労働力の価値」を「補填」するまでの（抽象的人間的労働による）新価値の創造過程が「価値形成過程」であり、価値形成過程が「この点を超えて継続され」、（抽象的人間的労働による）さらなる新価値の創造が継続される過程が「価値増殖過程」であることになり、したがって、「価値形成過程」も「価値増殖過程」も、いずれも「抽象的人間的労働による新価値の創造過程」にほかならない、ということになる。

④先に見た【引用⑤】での、「機械の価値の1000分の1が、日々、機械そのものからその日々の生産物に移行する。……機械総体は労働過程において不断に作用し続ける。したがって、……労働過程へは全体としては入り込むが、価値増殖過程（のちに「価値形成過程」に修正）へは部分的には入り込む」（p.348）との捉え方は、以上の「検討のまとめ」①～③に照らし、妥当性を欠き、適切ではない、と言わざるをえない。機械は、「価値増殖過程」はもとより、「価値形成過程」に「は入り込む」ことはないのである。したがって、保留していた【引用⑤】に付された*1【訳注】での、「価値増殖過程」の「価値形成過程」への、マルクス、エンゲルスによる「修正」問題は、「増殖」・「形成」のいずれが妥当かを問うこと自体、じつは無意味な問題であったと言わざるをえない。いずれも妥当・適切ではないのである。

⑤それではなぜ機械が「価値増殖過程」（第13章第二節）はともかくとして、「価値形成過程」に「部分的には入り込む」（第6章）と考えたのだろうか。

【引用⑤】で用いられている数字で言えば、機械は1労働日（12時間）でその全価値の1000分の1を新品に移転する。それが【引用⑥】のように、労働が「価値形成過程」である半労働日（6時間）で中断すれば、移転される（旧）価値は1000分の0.5にとどまることとなるが、1000分の1であれ、0.5であれ、機械の価値が「部分的に」新品に移転するのは、労働過程における具体的有用的労働の働きによってであることは、【引用④-1、2と⑥】に示されている。

6時間の労働の、抽象的人間的労働としての属性での働きによる、労働力商品の価値の「補填」分にあたる新価値の創造過程（価値形成過程）は、同時に進行する、同じ6時間の労働の、具体的有用的労働としての属性での働きによる、生産諸手段の（旧）価値の「一部分」=1000分の0.5の新品への移転過程でもあるが故に、あるいは12時間の労働ではその1000分の1の価値移転過程でもあるが故に、このことをもって機械は「価値形成過程」に「部分的には入り込む」と考えたのであろう、と推測できる。しかし、新品の価値総額（C+V+M）のなかに、機械の価値の「一部」（C部分）が移転していることをもって、機械が「価値形成過程に部分的には入り込む」と捉えることは、「価値形成過程」についての上記の「検討のまとめ」①～③での捉え方とは整合しない。「価値形成過程」という範疇を、生産手段の（旧）価値の移転を含む、新品の価値総額（生産物価値・旧価値の移転分+新価値分=C+V+M）全体の「形成過程」を意味するものとして用いることは、「検討のまとめ」①～③の内容とは明らかに異なると言わねばならない。

「価値形成過程」は、その「ある一定の点」を超えて以降「価値増殖過程」になると規定されているように、「ある一定の点」から、さらに継続・延長されていく新価値創造の過程なのであって、旧価値の移転は、そこに「はいり込む」余地のない過程であったはずである。「価値形成」も「価値増殖」も、労働の、抽象的人間的労働としての属性での働きによる新価値の創造に係わる範疇として捉えられ、規定されていること、したがって、(労働過程における)生産諸手段の価値移転を、「価値形成過程」に「はいり込む」ものとして扱うことは妥当ではなく、不適切であろう。

⑥そのように「はいり込む」と理解してしまうと、a) 機械の価値の「部分的」移転は、「労働過程」における12時間の具体的有用的労働によって行なわれ、b) 労働力の価値を「補填」する新価値の創造は、「価値形成過程」における6時間の抽象的人間的労働によって行なわれ、このa)とb)の両者が相俟って「価値形成過程」を構成する、という無理な説明—「区別」されるべき「生産過程の異なる二つの側面」(【引用①】、p.337)である「労働過程」と「価値形成過程」の「二つの相異なる諸結果」(【引用④-1、p.341】を無理に「接木」する説明—に陥ってしまうことにもなる。

機械の価値は、労働の、具体的有用的労働としての属性の働きによって、新商品に移転し維持されるだけであり、機械は「価値形成・増殖」には係わりがない、と捉えるべきなのである。

⑦資本主義的商品の価値は、それを生産する生産過程での、「(12時間という)「同じ時間内」の「一度」の労働＝「二つの属性」を有する労働によって、a) (具体的有用的労働という属性が発現する) 労働過程における生産諸手段の(旧)価値の移転分と、b) (6時間の必要労働時間+6時間の剰余労働時間＝12時間にわたる、抽象的人間的労働という属性の発現によって創造された) 新価値の合計、すなわち C (旧価値) + $V+M$ (新価値) であることからすれば、この資本主義的商品の生産過程は、「労働過程と価値増殖過程との統一」(【引用①】、p.337)というよりは、「労働過程と価値形成・増殖過程との統一」というべきものであり、その方が適切であろうと思われる。

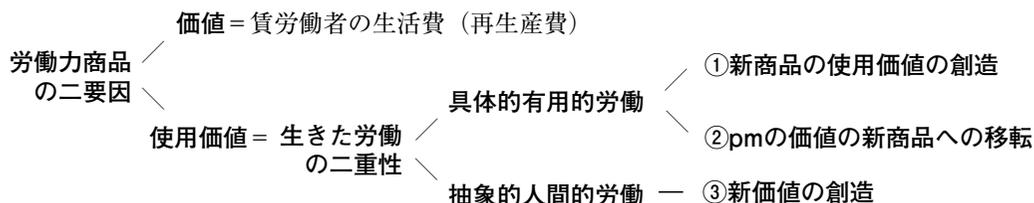
商品を生産する人間の「労働の二重性」の把握が、「経済学の理解にとって決定的な点である」ことの所以を、資本の生産過程の「異なる二側面の区別」、「労働過程」と「価値形成・増殖過程」の区別において具体的に開示してみせるところで、マルクスとエンゲルスは、思わぬ「躓きの石」を踏んでいたのではなかろうか。

以上に述べたことは、以下のように、労働力商品の二要因(使用価値と価値)と「生きた労働の二重性」の働きを示した【A図】、労働力商品の使用価値＝「生きた労働の二重性」の働きと、「労働過程と価値形成・増殖過程」との関連を、『資本論』の設例の数字を用いて示した【B図】、として纏めうる。

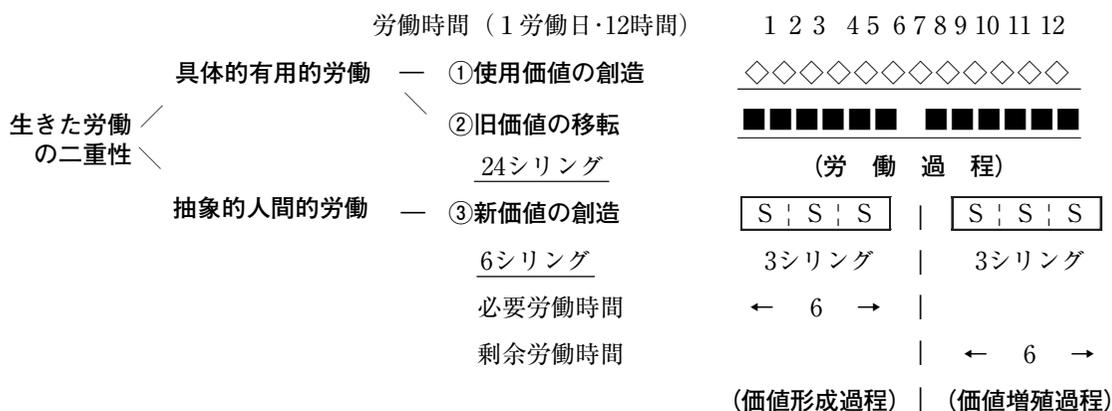
— . . . —

「労働力商品の二要因」・「労働の二重性」把握と「労働過程と価値形成・増殖過程」の関連図

【A図】



【B図】



* ①と②は、「労働過程」における、労働の具体的有用的労働としての属性によって、③は「価値形成・増殖過程」における、労働の抽象的人間的労働としての属性によって、遂行される。両過程の「統一」として、「資本の生産過程」がある。数字は『資本論』の設例による。